

オコツナイ川水系
河川整備計画

平成21年7月

北海道

第1章 対象流域と河川の現状

第1節 流域及び河川の概要

オコツナイ川は、北海道網走支庁管内雄武町の標高約150mの丘陵にその源を発し、東へ流れ、雄武町市街地を流下して雄武漁港南東側からオホーツク海に注ぐ、流域面積6.0km²、流路延長6.0kmの二級河川である。本流域は、全域が雄武町に含まれている。

河川名は、雄武町史によるとアイヌ語の「オ・ウ・コツ・ナイ（川尻・互いに・くつつく・沢川）」に由来しており、かつてオコツナイ川がポンオコツナイ川と河口付近で合流していたことを意味している。



雄武町を流れるオコツナイ川

(1) 地形・地質

流域の地形は、標高100～170mの第1段丘、40～70mの第2段丘、20～30mの第3段丘、7～10mの第4段丘と4段の海岸段丘が形成されており、オコツナイ川はそれらの段丘面を侵食し谷地形を形成して流下している。

流域の地質は、新第三紀の流紋岩、頁岩、凝灰角礫岩等と第四紀の段丘堆積物に分けられる。流紋岩は上流域及び下流域の左岸側に分布し、頁岩、凝灰角礫岩等は中流域から下流域の右岸側にかけて分布する。段丘面には、未固結の粘土、シルト、砂、礫などからなる第四紀更新世の段丘堆積物が広く分布している。

(2) 気候

流域の気候は、オホーツク海型気候に属し、年間を通じてオホーツク海高気圧の影響を受ける。年平均気温は、約5℃と道内でも比較的気温の低い地域である。年間降水量は約900mmと道内では比較的少なく、累計積雪深は約300cmと道内では平均的な地域である。また、1月頃には、シベリア方面より流氷が南下して接岸し河口を覆うことがある。

(3) 人口・産業経済

雄武町の人口は、昭和30年頃をピークに、その後産業構造の変化による都市部への人口流出や出生率の低下などの要因により減少し、平成17年国勢調査では約5,500人となっている。

基幹産業は、漁業と農業となっている。漁業では冬期間が流氷に閉ざされるといふ厳しい自然環境の中で、サケ・マス漁をはじめ、毛ガニ、ホタテ、ウニ、コンブ、タコ、カレイなど全国に知られるオホーツクの旬の味覚の産地として重要な役割を担っている。ポンオコツナイ川の河口近くには、まちの水産業の中心となる雄武漁港が位置している。

農業は、寒冷な気象条件と広大な土地資源を活かすことのできる酪農を中心に営まれている。乳牛頭数は約10,000頭、肉牛頭数は約3,000頭を超える。

林業は、トドマツ、カラマツを主体とした森林資源に恵まれ、古くから基幹産業の一つとなっている。

工業は、第一次産業と関連した「地場資源・地方資源」活用型工業で、これらの生産物を資源とした、水産・食料品加工製造業や木材・木製品製造業などが中心となっている。

(4) 観光・レジャー

オコツナイ川の中流域には、風の丘公園があり、高台からオホーツク海を望むことができる。公園内には噴水や水路、散策路が整備され、冬季は夜間照明のあるスキー場として利用され、地域住民の憩いの場となっている。



風の丘公園



風の丘公園内のスキー場

雄武町で行われるイベントでは、毎年ゴールデンウィーク時期には毛がにの浜ゆでや、かに汁が人気を呼ぶ「毛がに祭り」や、6月の最終週には雄武町名産の毛がに、ホタテ、サケ、林産加工品、野菜などの展示即売会が目玉の「雄武町産業観光まつり」が実施されている。また、7月には自転車でオホーツク海沿岸を縦断する「インターナショナルオホーツクサイクリング」が開かれ、その出発点となっている。



雄武町産業観光まつり



インターナショナルオホーツクサイクリング

(5) 土地利用

オコツナイ川の流域は、畑が約60%を占め、上・中流域は主に牧草地などに利用されている。下流域は市街地が形成され、役場などの重要施設があるほか、網走市を起点として紋別市を通り稚内市に至る国道238号が横断しており、オホーツク沿岸の市町村が結ばれている。

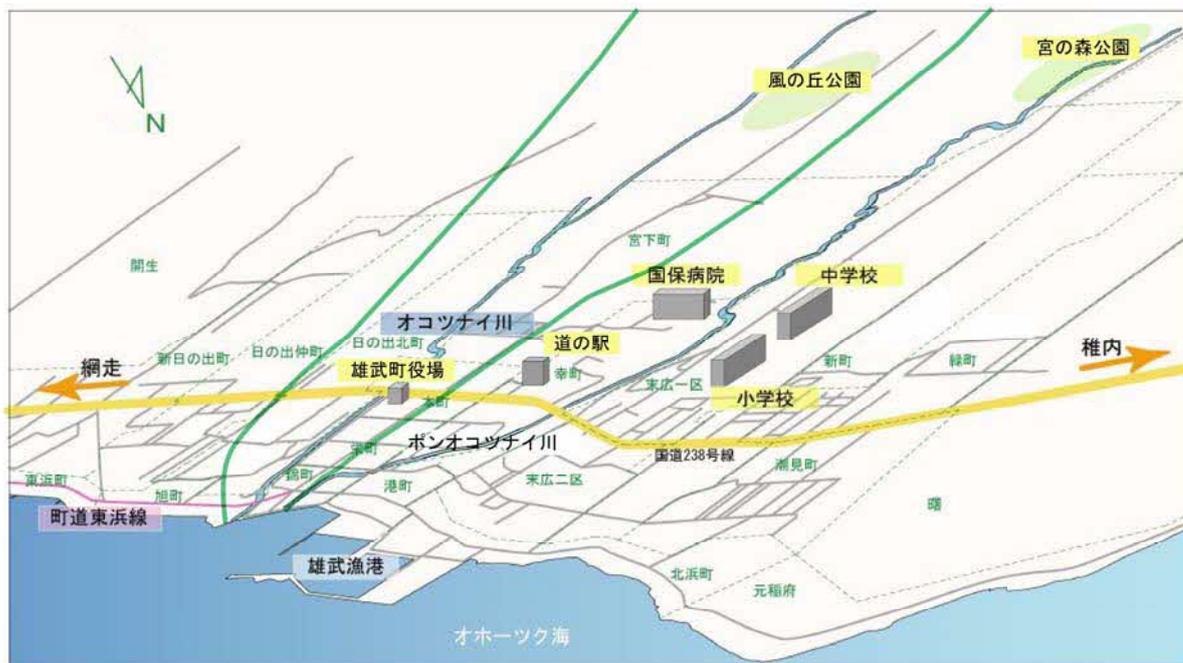


図 1-1

(6) 自然環境の状況

上・中流域は主に牧草地として利用されており森林は少ないが、河川沿いには河畔林、段丘崖には落葉広葉樹林が分布している。それらの森林や牧草地を生息の場や移動経路として、両生類や哺乳類などの動物が利用している。

下流域は雄武町の市街地になっており、河川は急勾配で河岸の法面は積ブロック、河床はコンクリートとなっている。このため、動植物の生息・生育環境は厳しく、上・中流域に比べ確認される種類も少ない。



上・中流域の状況



下流域の状況

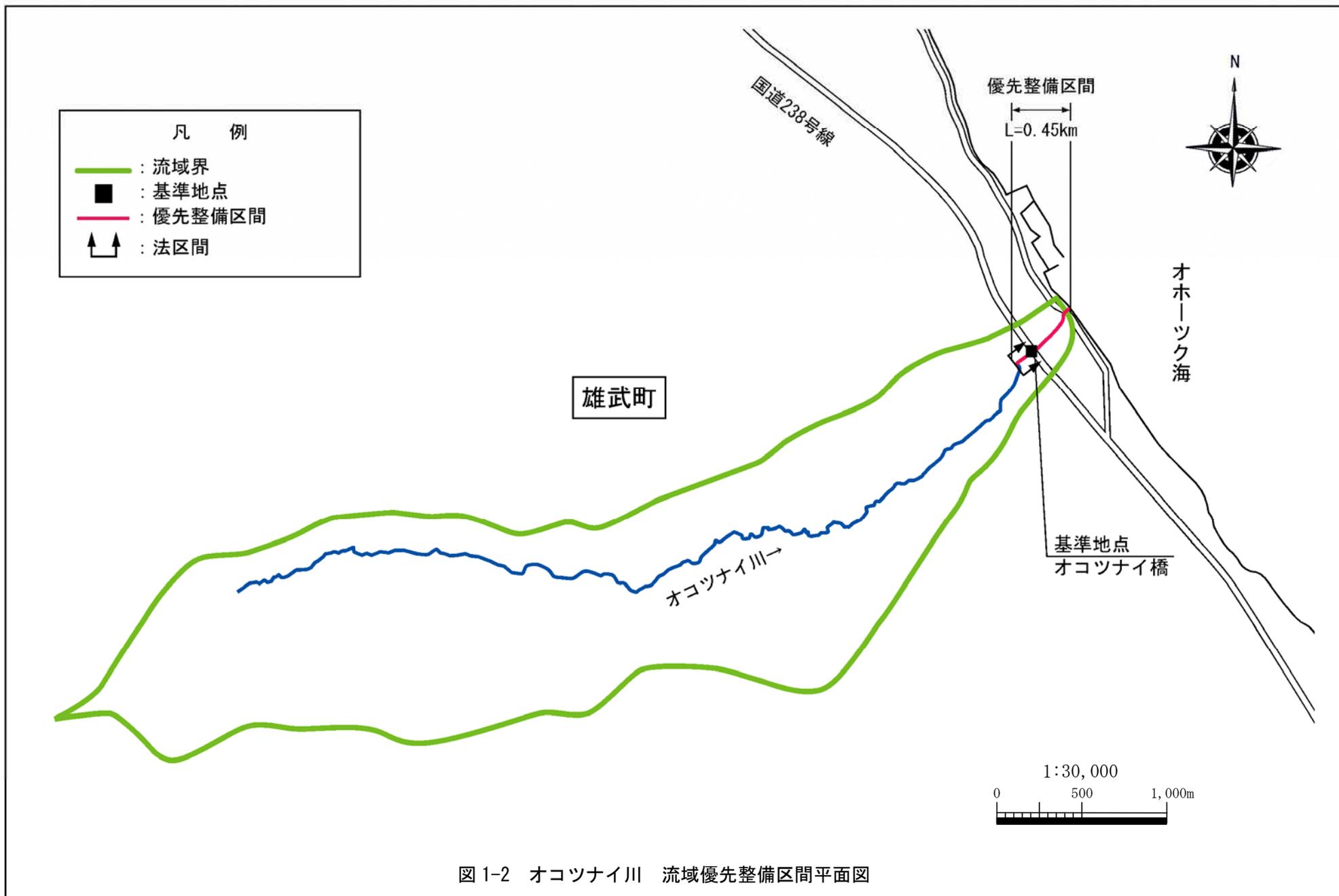


図 1-2 オコツナイ川 流域優先整備区間平面図

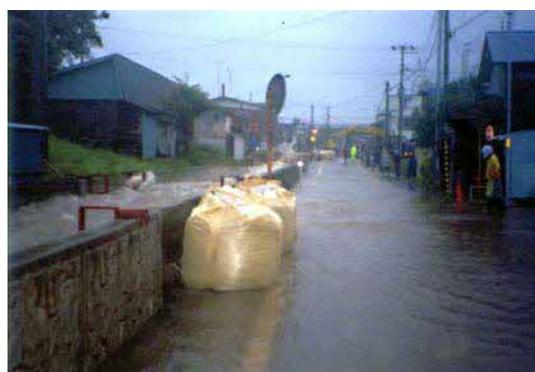
第2節 河川の現状と課題

1. 治水の現状と課題

オコツナイ川の治水事業は、昭和35年から昭和36年にかけて、都市下水路事業により河口から上流420m区間に積ブロック護岸などを設置したが、昭和54年10月の台風20号により雄武町市街地において浸水家屋35戸、平成10年9月の台風5号により浸水家屋33戸、平成13年9月の豪雨により浸水家屋6戸と度重なる洪水被害を受けている。このため、平成5年から平成14年にかけて、雄武町が護岸の嵩上工事を行ったが、抜本的な河川改修ではないため、依然として流下能力が不足している。



平成10年9月の被災状況



平成13年9月の被災状況

2. 河川の利用及び河川環境の現状と課題

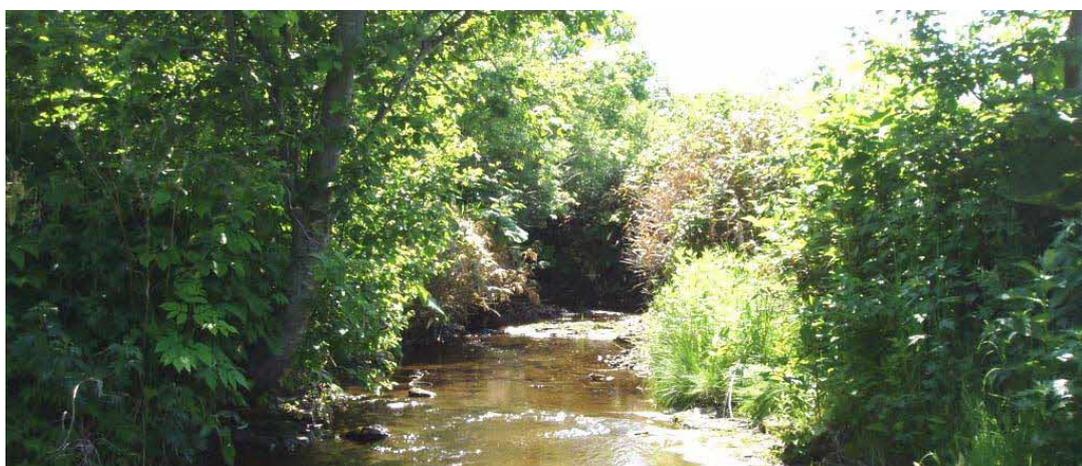
中流域には風の丘公園があり、散策、水遊び、スキー等、河川空間は地域住民及び観光客に利用されている。現況は、緑がなく水辺へのアクセスが困難となっているため、市街地を流れる下流域は水と緑のオープンスペースとして、水辺に親しめる施設の整備が求められている。今後とも地域住民との連携を図り、地域と一体になった川づくりを進める必要がある。

水利用はなく、濁水被害が生じた事例はない。

水質に関しては「公共用水域における生活環境の保全に関する環境基準」による類型指定はされていない。平成18年の調査ではBOD値は0.5~1.3mg/lで、AA~A類型に相当するが、大腸菌群数は市街地においてB類型の基準値を超過することから、引き続き水質の把握に努めていく必要がある。

自然環境はその地形的特徴から、台地となっている上・中流域、平地となっている下流域に大別される。

上・中流域はオノエヤナギやケヤマハンノキなどで構成される河畔林が分布し、アカハラ、センダイムシクイ、ハシブトガラなどの森林性の鳥類やエゾシカ、キタキツネ、エゾアカガエルなどが生息している。河道は瀬や淵が連続して分布し、河床は礫や岩盤で構成されており、ハナカジカやウキゴリ、シマウキゴリ、サクラマス（ヤマメ）などの魚類が生息している。また、幼生時にサクラマス（ヤマメ）等のサケ科魚類に寄生して移動するカワシンジュガイが礫の間に堆積した砂の中に生息している。河岸の侵食により形成される土壁には、カワセミの営巣地が確認されている。



上・中流域の河川状況



カワセミの営巣地



エゾシカ



サクラマス（ヤマメ）

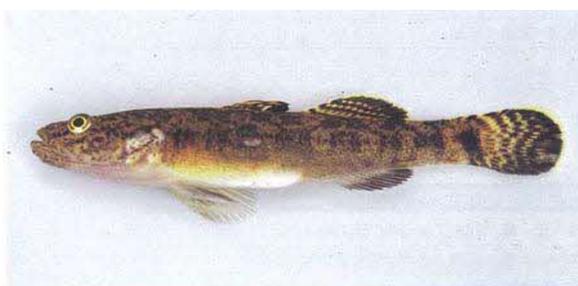


カワシンジュガイ

下流域は雄武町の市街地となっており、植生はほとんど見られず、鳥類はハシボソガラス、ハシブトガラス、スズメなどの一般に市街地に見られる種が多く、哺乳類や両生類、は虫類などは確認されていない。河川は1/110程度の急勾配であり、積みブロック護岸とコンクリート河床の三面張りになっている。このため、魚類は、河床に張り付くようにウキゴリやシマウキゴリなどの底生魚が生息しているものの、確認される魚種は上・中流域と比べ少ない。このように、動植物の生息・生育環境は厳しくなっている。



下流域の河川状況



ウキゴリ



河道内の状況

地域住民からは、市街地を流れる川として水辺に親しめる施設の整備が求められており、親水性や景観に配慮した川づくりが必要である。さらに上・中流域はサクラマス（ヤマメ）等のサケ科魚類やそれに寄生するカワシンジュガイが確認されていることから、魚類の遡上・降下など魚類の生息環境の保全・創出などに配慮した川づくりが必要である。

※動植物の掲載種については、「平成18年度 雄武川道単計画調査（環境調査）報告書」網走土木現業所による。

第2章 河川整備計画の目標に関する事項

オコツナイ川における河川整備の基本方針としては、水害の発生状況、河川利用の状況、河川環境の保全を考慮し、雄武町総合計画などとの整合を図り、河川整備にあたっての目標を明確にして、河川環境に配慮した治水・利水対策を推進するものである。

第1節 計画対象区間

河川整備計画の対象区間は、オコツナイ川水系の北海道知事管理区間の河口から0.45km区間である。

オコツナイ川 L=0.45km

第2節 河川整備計画の対象期間

河川整備計画の対象期間は、河川整備計画策定から概ね30年間とする。このうち、優先整備区間については、河川整備計画策定から概ね10年間とする。

本計画は、現時点の流域の社会状況・自然状況・河川状況に基づき策定されたものであり、策定後のこれらの状況の変化や新たな知見・技術の進歩などの変化により、必要に応じて見直しを行う。

第3節 洪水などによる災害の発生防止又は軽減に関する事項

オコツナイ川水系河川整備基本方針に基づきオコツナイ川流域の社会的、経済的重要度と道内他河川との計画規模の整合を図りつつ、平成6年8月及び平成10年9月の洪水を踏まえ、洪水が安全に流下できるよう河川整備を行う。

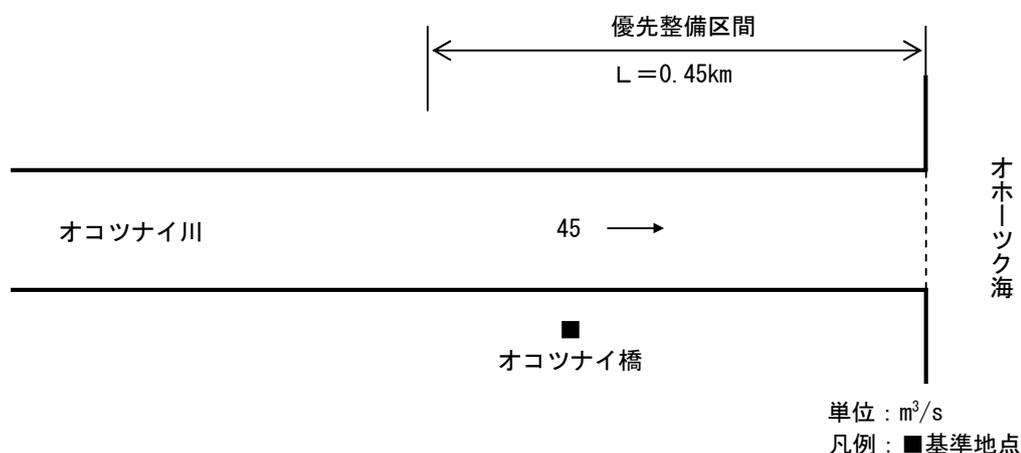


図 2-1 整備計画目標流量配分図

第4節 河川の適正な利用、流水の正常な機能の維持に関する事項 及び河川環境の整備と保全に関する事項

河川の適正な利用及び流水の正常な機能の維持に関しては、現在のところ水利用はないが、今後とも健全な水循環の確保の観点から関係機関などと連携を図りながら、適正かつ合理的な水利用が図られるよう努めるものとする。

流水の正常な機能を維持するため必要な流量については、今後、流況等の調査を行い、動植物の保護、流水の清潔な保持等を考慮し調査検討を行ったうえで定めるものとする。

水質については、大腸菌群数がB類型の基準値を超過する箇所があることから、引き続き水質の把握に努めるものとする。現状の水質を悪化させる要因が認められる場合は、その水質改善について関係機関との調整を図るものとする。

河川環境の整備と保全に関しては、現況河道において魚類が確認され、上流域には多くの動植物が生息・生育していることから、河道の縦断的な連続性に配慮するなどの良好な河川環境の整備および動植物の生息・生育環境の保全に努めるものとする。

第3章 河川の整備の実施に関する事項

第1節 河川工事の目的、種類及び施行の場所並びに

当該河川工事の施行により設置される河川管理施設の機能の概要

(河川工事の目的)

河口から0.45kmまでを河道の掘削などによって、計画高水流量45m³/sの流下能力を確保することにより、雄武町市街地への洪水被害を防止・軽減する。

(河川工事の種類)

河道の掘削、護岸の設置、落差工の設置、堤防の整備

(工事実施に伴う配慮事項)

動植物の生息・生育環境に配慮し、多様な流れの創出、水際植生の確保などに努め、魚が遡上・降下できるように低々水路および魚道を設けて河道の連続性を確保する。また、河道掘削後は河床の岩盤が露出するため、必要に応じて礫を補足する対策を行い生物の生息・生育環境の創出を図り、モニタリングを行いながら順応的に管理を行う。護岸等の施設は周辺との景観の調和に配慮する。さらに、散策路を兼ねた管理用通路の整備、階段の設置など親水性の向上に努める。

(河川工事の施行の場所)

河口から0.45km地点までの区間

(河川工事の施行により設置される河川管理施設の機能の概要)

本水系の主要な地点における計画高水位及び川幅は次表のとおりとする。

主要な地点における計画高水位及び川幅一覧表

河川名	地点名	河口からの距離 (km)	計画高水位 T.P. (m)	川幅 (m)
オコツナイ川	オコツナイ橋	0.36	4.85	8

第2節 河川の維持の目的、種類及び施行の場所

1 河川の維持の目的

河川の維持管理は、地域の特性を踏まえつつ、災害発生の防止、河川の適正な利用、流水の正常な機能の維持、河川環境の整備と保全など、総合的な観点から適切な実施に努めるものとする。

2 河川の維持の種類

(河川の巡視及び点検)

平常時は定期的に河川巡視を行い、河川管理施設の状況、河岸や河道内の状況等を把握する。

出水時は降雨や河川水位の状況から、河川管理施設の状況や異常の発生の有無を把握するため、安全が確認されるまで河川巡視を行う。

出水前後、地震後、津波後等は河川管理施設の総点検を実施し、被災状況を把握し、再度災害に備える。

(河床の維持)

河床の低下は、護岸構造物の基礎が露出するなどにより災害の原因となるため、定期的な河川の巡視により、早期発見に努めるとともに、河川管理上の支障となる場合には、適切な処理を行う。長期の間に、または出水により土砂が堆積し、洪水の流下の阻害となるなど治水上支障となる場合は、水辺環境の保全に配慮し、掘削等必要に応じ対策を講ずるものとする。

(伐採、除草による維持)

河川環境への配慮から、沿川の河畔林は極力保全するものとするが、流水の阻害や河川管理施設に悪影響を与える樹木については、動植物の生息地・生育地の状況や景観などに配慮しながら伐採する。また、地域の協力を得ながら除草等を行う。

(護岸の維持)

護岸については、法崩れ、亀裂、陥没などの異常について、定期的な河川の巡視により、早期発見に努めるとともに、河川管理上の支障となる場合は適切な処理を行う。

第4章 河川情報の提供、地域や関係機関との連携などに関する事項

第1節 河川に係わる調査・研究などの推進

水文観測を継続的に進める他、必要に応じ下流域から上流域までの水質調査や河川周辺の生態調査などを行い、データの収集に努め、河川改修後の環境への影響などについての調査・研究を関係機関の協力を得ながら実施していく。

第2節 河川情報の提供の促進

雨量・水位情報を収集するとともに、それらの情報をインターネットなどにより地域住民や関係機関に提供し、洪水時の警戒避難、水防活動などの必要な対策の支援を迅速に行う。さらに、河川や河川事業に関する情報をパンフレットやホームページなどを活用し提供する。

また、計画規模や現況流下能力を超える洪水に対して極力被害の防止・軽減を図るため、関係機関と連携を図り、浸水想定区域図の公表や洪水ハザードマップの作成を支援する。

第3節 地域や関係機関との連携

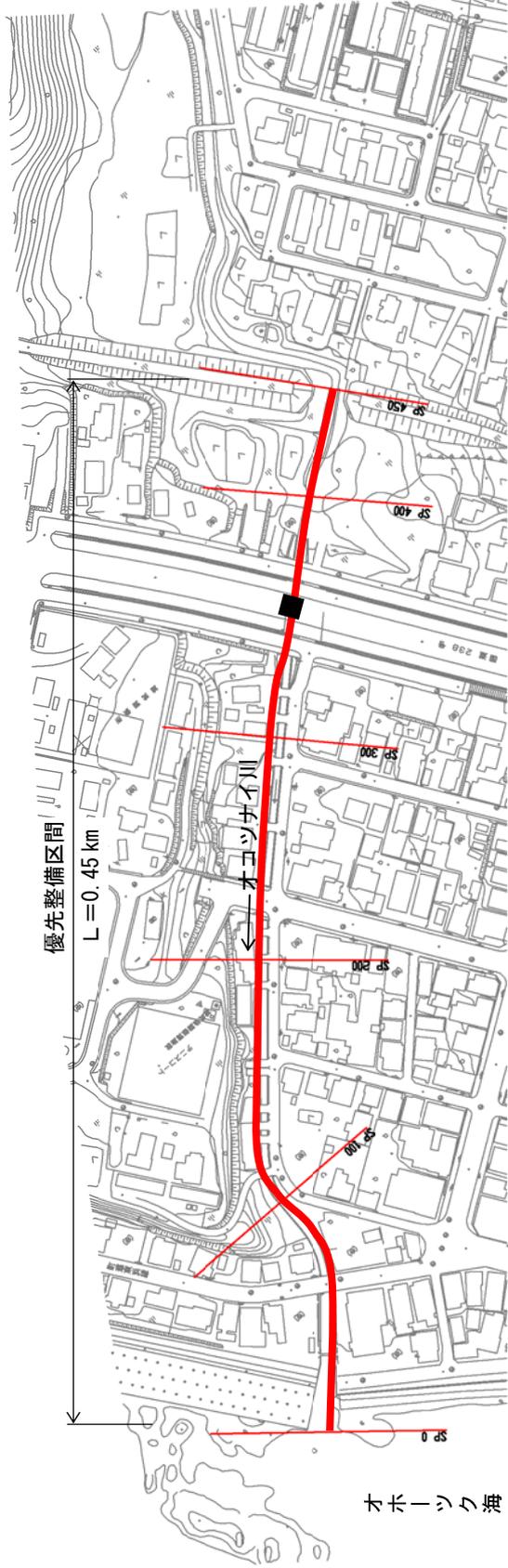
関係機関と連携し、洪水被害を防止・軽減するための水防活動を支援する。また、水質の悪化などの水質事故が発生した際には、事故状況の把握、関係機関への連絡、河川や水質の監視、事故処理などを、原因者及び関係機関と協力して行う。

また、流域住民に親しまれる川づくりを進めるため、関係機関と連携し、流域住民の河川愛護思想の普及に努める。

河川整備計画・付図

〔北海道知事管理区間〕

平面図



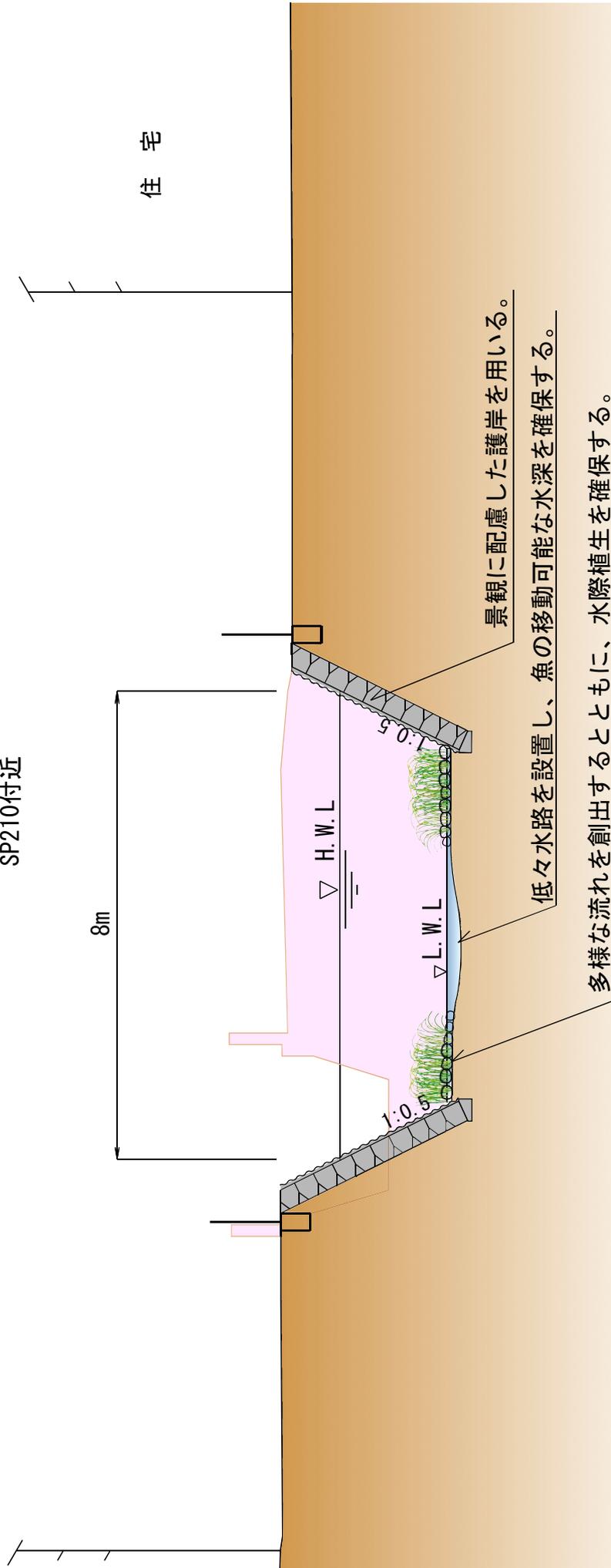
S=1:3,000

凡	例
■	基準地点
—	優先整備区間

オヨツナイ川

横断図

オコツナイ川
SP210付近

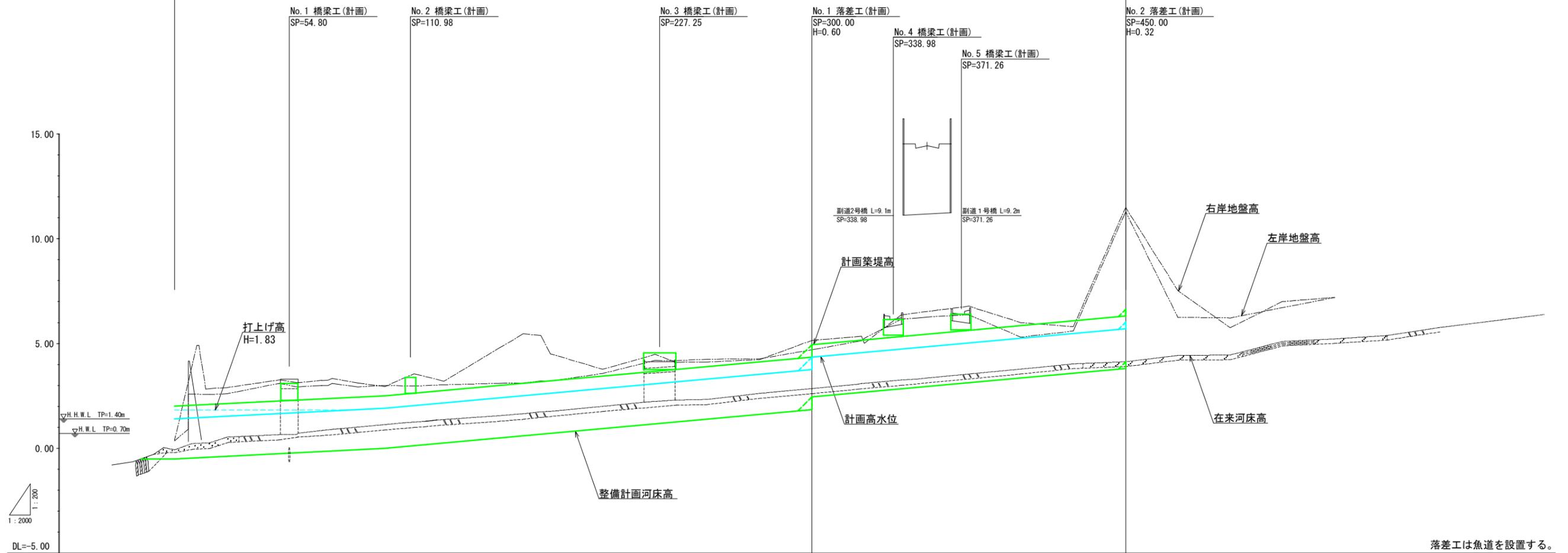


* 標準断面図における形状についてイメージを示したものである。

	現況地盤
	掘削部分

オコツナイ川

優先整備区間 L=450m



計画築堤高		2.01	2.51	4.35	6.22
計画高水位	1.41	1.91	3.75	5.71	6.22
計画高水勾配	-1/200		-1/110		
地盤高	0.39	2.95	5.15	11.50	
右岸					
左岸	0.36	3.00	4.70	11.30	
在来河床高	-0.07	1.13	2.95	4.13	
測点	0	100	300	450	

※標高値：「2000年平均成果」対応値
 ※整備計画河床高：整備計画における河川工事や施設の維持管理を行う際の参考値